

2018-7-16更新

古代ギリシャの漕法 (紀元前5世紀)**Ancient Greek Rowing Technique (BC 5c)**

古代ギリシャの壺絵などには、軍船の漕手が、クッションを体にくくり着けていた様子が描かれている。しかし目的は永く解らなかつた。しかし1996年、米国・ルイヴィル大学の考古学者、J. R. ヘイルがその謎を解いた。古代ギリシャ船の建造技術の書物や文学・芸術作品を調べ、(従来の定説では19世紀後半の発明と言われていた)スライディング・シート～スライディング・ストロークの技術が、すでに紀元前5世紀には使われていたことを明らかにしたのだ。

アリストファネスの喜劇、「蛙」には、尻に火ぶくれができた漕手が登場し、また壺絵や彫刻にも、漕手が膝を高く上に曲げている様子が残っている。シートが動くのではなく、漕ぎ手が「クッション」を使って、腰を前後に滑らせていたのだ。なんと、今日ソファに置かれる「クッション」の、その語源は古代ギリシャ船のスライディングシートだったのだ!

クッションをつかったスライディング・ストロークの技術はその後、なぜか忘れ去られ、後の19世紀後半に「再発明」されたときには、油を塗った鹿皮で、腰をスライドさせていた。

(参考:日経サイエンス1996.7月号)

トマス・ダゲッツ・コート&バゲッジ・レース 1715年**Thomas Doggett's Coat and Badge Race**

18世紀の英国、スチュアート朝に世継ぎがなく、代わりに英国王家の血を引くドイツ・ハノーバー家のジョージが即位した。それを祝して1715年、王立劇場の俳優、トマス・ダゲットが、テムズ川でウォーターマン(渡舟の漕ぎ手)を集め、懸賞つき4マイル競漕、「ダゲッツ・コート&バッジ・レース」を始めた。勝者にはと膝まで届きそうな長さで、燃え立つ炎(つまり blaze)のような鮮赤色「ウォーターマンズ・コート」と「バッジ」が贈られたのだ。このコートが、「プレザー・コート」の語源となった。「バッジ」の方は、上腕につける大きな銀バッジ(というより腕章)で、「ハノーバーの白馬」の図柄があった。勝者はまた、国王の御座舟の漕手の名譽も授かったという。レースは現在も行なわれ、現存する世界最古の「レース」でもある。

「コーチ」:馬車から指導者への変身(1840年代)**Origin of "Coach" (1840's)**

ハンガリー北部にコーチという村があり、14世紀頃には四輪馬車を作っていた。1382年、ボヘミアのアン王女が英国のリチャードII世と結婚、そのとき持参したコーチ村の馬車がすばらしく、以後の英国にも大きな影響を与え、15世紀後半には欧州全体に波及し、コーチは馬車の代名詞にまでなった。時代は下り、1840年代の英国、オックスフォード大学の学生たちは試験に備え、家庭教師を雇っていた。家庭教師は、心から生徒の進歩を願い、行き届いた指導をし、まるで「四輪馬車に載せてもらって目的地まで快適に連れていってくれる」と好評で、そして家庭教師を「コーチ」と呼ぶようになった。そして1880年代にはスポーツの分野でも、まずロウイングで指導者を「コーチ」と呼ぶことが始まり、それが次第に他のスポーツにも広がっていった。

絶対温度のケルビン卿もボートを漕いでいた**Lord Kelvin (1824-1907),**

英国の物理学者、ウィリアム・トムソン(William Thomson)は、ケンブリッジ大学で、ボートを漕いでいた。後にケルビン温度とも呼ばれる)絶対温度、熱力学第2法則、ジュール・トムソン効果の発

見など、多数の業績があり、電磁誘導や磁気力の表現にベクトルを使い始めた、古典物理学、特に熱力学の開拓者の一人である。その功績により、ケルビン男爵(Baron Kelvin of Largs)、通称ケルビン卿(Lord Kelvin)と呼ばれるようになった。

不思議の国のアリスはボートの上で生まれた 1862**Lewis Carroll (1832-1898),**

「不思議の国のアリス」で有名なルイス・キャロル、本名:チャールズ・ラトウィッジ・ドジソン(Charles Lutwidge Dodgson)は、数学者、論理学者、写真家、詩人でもあった。幼い頃から聡明だったが、吃音障害があり、それが生涯、彼の内面に影響したようだ。1851年、父の母校でもあるオックスフォード大・クライスト・チャーチ・カレッジに入学した。気まぐれだが成績抜群で、1854年に首席で卒業、すぐに同校の数学講師となった。収入は良かったが退屈だったらしく、生徒達も、彼の授業には関心を示さなかった。1880年、新しい学寮長;ヘンリー・リデルが着任すると、その家族、特に3姉妹(次女がアリス)と親しく交際し、近郊でボート遊びも楽しんだ。

1862年夏、三姉妹らとアインス川への遠漕中、ある物語が誕生した。他愛無い語りだったが、アリスが「書き記して」とせがんだので、1864年のクリスマスに、手書きの挿絵を添えた「地下の国のアリス」(肉筆本)をアリスにプレゼントした。その写しを出版社に持ち込み、1865年には「不思議の国のアリス」を出版、すぐに大ベストセラーとなった。しかしそれが皮肉にも、彼自身を、ドジソンとしての堅実な人生と、キャロルとしての成功者の人生に二分し、その乖離が、アリス本の成功に伴い拡がっていった。

(参考・引用:Wikipedia ほか)

タフト;ボートにもバスにもハマった大統領**William Howard Taft (1857-1930),**

ウィリアム・タフトは、1857年・オハイオ州シンシナティ生まれの第27代米国大統領で、エール大学時代にボートを漕いだ。フィリピン(スペインから独立後、米国植民地となっていた)の初代知事などを経て、1909-1913年に大統領を務め、後に連邦最高裁判所長官も務めた。ポトマック河畔の桜は、彼の大統領在職中に、東京から贈られたものである。「ホワイトハウスは世界で最も孤独な場所」という名言?も残したが、歴代大統領中最大の巨漢で、ホワイトハウスの浴槽に嵌(はま)り、出られなくなったエピソードを残す。(参考:Wikipedia 他)

近代五輪の父、クーベルタン男爵も漕艇狂**Pierre de Coubertin (1863-1937),**

ピエール・ド・クーベルタンは、1863年生まれ。近代オリンピックの創始者として有名だが、若い頃からロウイングに熱中していた。1880年代初頭には、フランスの学校教育にスポーツを取り入れることを推進した。1896年には、近代オリンピックを始めたが、第1回大会(アテネ)から男子ロウイングを取り入れた(女子ロウイングは1976年から)。1920年には「ロウイング・キュアズ」(Rowing Cures; 漕艇療法といった意味)を著し、ロウイングの健康への効用や教育的価値を説き、関節炎や近代的生活による疲弊(exhaustion)の解消にもロウイングが有用と力説した。1922年には「スポーツと知性」(Sport and Intelligence)を書き、ロウイングが「理想的なディシプリン(discipline; 躰、訓練法)だ」と説いた。1937年、74歳で死ぬまで漕ぎ続けた漕艇狂である。



スカルを漕ぐクーベルタン /students.ithaca.edu/~jdomina1/story.htm

ボーイ・イン・ブルー (ネッド・ハンラン) 1876-84

Boy in Blue (Ned Hanlan) 1876-1884

1870年代、欧米では賭け競漕が盛んだった。エドワード・ネッド・ハンラン(1855-1908)は、カナダのトロント生まれ。5歳でトロント湾を漕いで横断し、20歳の頃には投資家たちが「ハンラン・クラブ」を結成し彼のレースを仕切った。1876年のプロ・デビューは、強豪ひしめく中、5km競漕で、リードを奪った後、一旦漕ぐのを止め、追いついてきたのを再び引き離れた。決勝では21分9秒のコース記録。173cm・68kgと小柄だったが、長いレンジでスムーズに力強く漕いだという。青いシャツで漕ぎ「ザ・ボーイ・イン・ブルー」と呼ばれた。1880年にオーストラリアのチャンピオン、トリケットと、ロンドン・テムズ川で対戦。ハンランはわざと蛇行したり、漕ぎ止め追いつくのを待ってからまた引き離したり、岸に寄り観衆に会釈するなど、何度も侮辱的な態度を繰り返し、最後は艇をジグザグに進めながら圧勝、世界チャンピオンとなった。1882年の再戦も同じ調子、1884年にオーストラリア人のウィリアム・ビーチに敗れるまでの4年間、チャンピオンの座を守った。

もうひとつのブレザー伝説 1870

Another Legend of "Blazer"

ダゲッツのコート&バッジから下ること1世紀半、もう一つのブレザー伝説が生まれる。1870年代、ケンブリッジ大学セントジョーンズカレッジのLMBC(レディ・マーガレット・ボート・クラブ)クルーは、遠くからでも見えるようにと、鮮紅のユニフォームで、オックスフォード大学との対抗戦に登場した。

その燃えるような赤に、人々は、「BLAZER!」とうなった。これが今言うスポーティなジャケット「ブレザー」の語源になったという。

夏目漱石とボート (1884-1897)

Soseki Natsume and Rowing

参考:「夏目漱石とボート」(熊本県ボート協会)・他

1884(明治17)年、大学予備門専科(後の一高)に入学した夏目漱石は、端艇競漕を好んだ。「私の経過した学生時代」(「中学世界」, 明治42年)に「...どちらかと云えば運動は比較的好きの方で<中略>唯遊んだという方に過ぎないが、端艇競漕などは先ず好んで行(や)った方であろう。<中略>好きでやったと云っても、チャンピオンなどには如何してもなれなかった」とある。

1895(明治28)年、五高(現熊本大)に端艇部が結成され、翌年の第1回春季競漕大会の翌日、夏目漱石が松山から熊本に到着。タイミングの良い経験者の登場で、漱石は早速、第2代部長・「名誉部員」に就任した。月俸100円から月30円を部費として払い、寄付を募りつつ艇庫建設にも尽くした。1897(明治30)年には佐世保から日清戦争の戦利品のカッター2艇を譲り受けたが、補修や、他校生徒まで頼んでの廻漕経費が膨らみ、100円の大赤字になった。漱石は結局、その借金を肩代わりし、合わせて端艇部部長も辞任してしま

った。

ロー・スクールよりロウイング:湖をつくった鉄鋼王

Row than Law

1902年、米国・ニュージャージー州のプリンストン大学の学長となったウッドロー・ウィルソン(後の第28代大統領)は、「他の一流大学に並ぶには、新しいカレッジ(学寮)制が必要」と考え、1903年には、篤志家たちに建設資金の援助を求めた。

鉄鋼王と呼ばれたアンドリュー・カーネギーが、親友のハワード・ラッセル・バトラー(プリンストン大OB)と大学へ向かう連絡バスの車中でのこと。バトラーは、「狭くて往來の激しいデラウェア&ラリタン運河で漕ぎながら、『プリンストンとキングストンの間、ストニー・ブルークとミルストーン川の一帯の沼地を整備してダムを作って漕いだら素敵だろうな』と夢を語っていた」ことを話した。それはカーネギーの好奇心をくすぐった。カーネギーはバトラーに、その計画の予算をたてるように言い、そして大学に湖の寄贈を申し出た。曰く、「プリンストンに必要なのは、ロー・スクール(Law School, 法科大学院)ではなくロウイング・プログラムだ」と。15万ドルが寄付され、1905年の春に着工、1906年の秋に、キャンパスに隣接して「カーネギー湖」が完成した。もちろん艇庫つきである。ウィルソンは、「私たちはパンを頼んだが、彼はケーキをくれた」と。今日でも、プリンストンにロー・スクールは無いが、すばらしいロウイング・プログラムが若者を育てている。

ジョン・B・ケリー

John B. Kelly, Sr. (1899-1960)

後にモナコ大公と結婚しモナコ王妃となった著名な女優、グレース・ケリーの父であるが、オリンピックで3回の金メダルを獲得し、また一代で財を成した億万長者でもある。

盲目の整調

The Blind Stroke in 1930

(改訂新版ボート百年/宮田勝善著、時事通信社、1976年より抜粋)

昭和10年の頃、アメリカ漕艇界の一方の覇であるコーネル大学は、全米エイト学生選手権レースに盲目のドン・モーガン(Don Morgan)を整調に起用した。各校は驚いた。コーネル大は優勝こそしなかったが、モーガン整調の下で堂々の戦績を納めた。

モーガンは高校時代、遊んでいた花火が爆発して視力を失った。しかしその肉体的ハンディキャップにめげず、よく勉強もし、身心のよりどころをボートに求めてじつじつ練習をよくやった。コーネル大のコーチは彼の熱心さを認め、整調の要席を与えたのである。これはウォーターマンシップさえあれば、ボートは盲目でも漕ぐこともできるし、またいくらでも強くなれるという好個の一例である。



早慶レガッタ1957年「あらしのボートレース」

Boat Race in the storm (1957)

1957(昭和32)年5月12日、第26回早慶レガッタは、大雨と強風で大荒れとなった。序盤は下馬評どおり、慶応がリードしたが、浸水が激しく次第に艇速が落ちた。早稲田は、準備していたアルミ食器で3人(整調ペアと舵手)が水を掻き出し、6人で漕ぎ続けた。結果、慶応は途中で沈、早稲田は6人漕ぎで完漕、勝利した。早稲田は「艇を沈めず目的地に着けること」に、慶応は「全員が最後までオールを休めず漕ぎぬくこと」に、夫々の競漕哲学を貫いたのだった。この話は1961~1970(昭和36~45)年、小学校の国語の教科書(学校図書、6年上)に、「あらしのボートレース」として掲載され、「自分の意見を述べ合う、民主的討論の教材」となった。



早慶レガッタ HP (www.the-regatta.com) / 原版: 朝日新聞社より

東大4連覇(1979-1982年)

東京大学は総じてスポーツが弱く、「頭は良くてもガリ勉で運動音痴」と揶揄されることもあるが、ボートがその定説を覆している。1971(昭和46)年、東京大学漕艇部は全日本のエイトで優勝、その後一時低落傾向となるが、昭和50年代に西浦義幸監督・須藤武幸コーチの新体制が始まり、淡青会も組織的に支援、強化に取り組んだ。1977(昭和52)年、インカレにエイト優勝、1年を開けた1979(昭和54)年から4年間、全日本で優勝を続けた。ロウイングが高度に知的な活動であり、知的水準と戦績に「正の相関」が見られることを身をもって証明したといえる。公私、内外を問わず、真の名門大学ではすべからずボートも強い。

シルケン・ローマン

カナダのトップスカラー、シルケン・ローマン(女性)は、カナダ・スポーツ界の中でも、最も有名な選手の一人である。

1992年、ドイツのレガッタで練習中、衝突事故で大腿部になしペアのバウが突き刺さり、骨折と筋を損傷する重傷を負った。しかし、10日おきの5度の手術を経て、事故から10週間後、パルセロナ五輪・女子シングルスカルで銅メダルを獲得した。さらに、1996年、アトランタ五輪では銀メダルに輝いた。

スティーブ・レッドグレイブ

Steve Redgrave

参考・引用: 共同通信社ウェブサイト「シドニー日記」9月24日、「五輪選手はみな平等/王者の気骨に触れる」より

news.kyodo.co.jp/kikaku/sydney/diary/diary24.html

英国のスラップ漕手、スティーブ・レッドグレイブは、1984年のロサンゼルス五輪以来、連続5個の金メダルを獲得した。英国では今世紀最高のオリンピック選手と称えられ、誰もが知る。しかし、シドニーまでの4年間、彼のトレーニングは、同時に糖尿病との戦いでもあった。医師でもある夫人との二人三脚で勝ち取った栄光だった。シドニー五輪での優勝記者会見。レッドグレイブ

は興味深いコメントを残す。

「競技を終えたら、レースに出た選手全員と互いに健闘をたたえ合いたい。僕らはマスメディアに話をするために競技しているのでは決してない」。

国際大会での観覧席前の立派な表彰ステージでの入賞者の表彰と、敗者のメディアの扱いの落差についての苦言だった。スポーツの商業化と共に、メディアに引きずられがちな大会運営に釘を刺した。レースの前・後、勝者も敗者も関係なく、平等・公平な運営がなされ、スポーツマンシップが健全に維持される環境を維持するために、レッドグレイブのコメントは、(特にレガッタマネジメントへの)警句として、永く胸に刻み続けるべきだろう。

グレゴリー・ペック

Gregory Peck (1916-2003)

20世紀を代表する米国の名優。幼少の頃に両親が離婚、父と祖母に育てられ、わんぱくな少年時代を過ごす。父の希望でカリフォルニア州立大・バークレイ校(医学部)に進学。しかし家計を助けるため一度は中退し石油会社で働く。しかし再び大学に戻り薬学を専攻。大学ではボートを漕ぎ、選手として活躍したが、脊髄を痛め、部活動を断念した。スポーツへの夢を断たれた後、演劇に惹かれるようになり演劇部に入り、演技に魅了されて俳優を志し、卒業後、ニューヨークに移り、アルバイトをしながら本格的に演技を学んだ。1942年にブロードウェイにデビュー、1944年には映画デビューを果たした。脊髄の負傷による兵役免除で、戦時中の男優不足の折、引っ張りだこ、ヒット作にも恵まれ、揺ぎ無いスターとなった。オードリー・ヘップバーンとの「ローマの休日」(1953)はあまりにも有名。他に「白鯨」や、アカデミー賞の「アラバマ物語」(1962)など多数。2003年に老衰で死去。

野田知佑 1938-

Tomosuke Noda

カヌーイストとして著名な野田知佑氏だが、早稲田大学(文学部英文学科卒)時代、ボートも漕いだことがある。隅田川のウジのわいたネコの死体なんかと一緒に流されながら、「どうして日本の川はこんなになっちゃったんだろう?」なんてきつと思ったに違いない。それできつときれいな川を求めてカヌーで日本や世界を周りだしたんだろうねえ(たぶん)。

「魚眼漫遊大雑記」野田知佑・新潮文庫-7-2¥360p.190~196

スティーブン・ホーキング博士(1942-)

Stephen W. Hawking



中国・江(Zhejiang)大学ウェブサイトより。

英国の理論物理学者、スティーブン・ホーキングは、ブラックホールの蒸発や宇宙論などの研究で知られ、アインシュタイン以来とも評される著名な科学者である。ALS(筋萎縮性側索硬化症)のために車椅子と人工音声装置で話す姿を知っている人も多いだろう。「ホーキング、宇宙を語る」といった一般向けの本もベストセラーとなった。

子供の頃から運動は得意でなかったが、1957年に17歳でオックスフォード大に進学し、ユニバーシティ・カレッジに籍を置き、ボート部でエイトの舵手を務めた。充分有能だったが、ファーストクルーには興味を示さず、セカンドクルーに身を置いたという。ケンブリッジとの対抗レースには出場できなかったが、大学対抗

2018-7-16更新

戦には出場した。川の流れをつき進みながら、宇宙の時間の流れの中を進む存在を感じ取り、ビッグバンやブラックホールを実感したのかもしれない。

1961年(大学3年)、「自分がさらに不器用になったような」気がして、理由もなく転倒することもあった。1962年、ケンブリッジ大学・大学院に移籍後、専門医の検査でALSであることがわかった。もちろん非常に大きなショックだったが、その頃、白血病で今にも絶命しかかっている一人の少年に出会う。あまりにも苦しいその姿を見て、「自分より厳しい状況の人がそこにいる」と感じたとき、「少なくとも自分のこの状況は、それほど大したことではないのでは」と思えるようになった。

また、ある夢をみた。今にも処刑されようとしている夢だった。その時、「もし、執行猶予があるのなら、しておきたいことが沢山ある」ことに気がついた。「この病気の進行を知らずにいたとき、私はただ、だらだらと生活をしていた」と気づいた。また、他の人々を救うために自分の命を犠牲にする夢も幾度か見たという。結局、「どうせ死ぬのなら素晴らしい事をおこなって死ぬほうがよいのではないか」と思うようになった。未来は雲行きが怪しいままだったが、健康な頃よりも、生きることを楽しめるようになった。絶望を乗り越え、楽観的になり、研究でも成果をみせ始めた。1965~74年にかけて、ブラックホールの蒸発理論(ホーキング輻射)など、次々と重要な論文を発表した。1979年には、ケンブリッジ大学ルーカスカレッジの教授に就任、気持ちが落ち込んだとき、今でもその少年のことを思い出すという。

「スティーブン・ホーキングー天才科学者の光と影ー」(M. ホワイト, J. グリビン著, 林一・鈴木圭子訳, 早川書房, 他)

をとっている剃刀の刃のように感じられました。／ついに、その瞬間はやってきました！ーボートを前に押し出し、ロープは放されました。「私は自由だわ！」

親子連れのアヒルのように、パティと私は、水路の狭い出口の方へ楽にさかのぼっていきました。最初のひと漕ぎでボートはひっくり返らず、興奮した微笑が私の顔に広がります。後ろで聞こえるパティの声もそんなに遠くなく、私がダブルスカルで整調を漕いだときの、多くのパートナーの声に劣らず、私を支えてくれました。右舷のすぐそばを、別のボートを通過させるために止まったときは、神経質な緊張が大気を切断しました。しかし何事も無くこの状況を切り抜けたと知ったとき、私の心は天にも昇る気持ちでした。

リネット: …しかし、時々、自分のオールがスクウェアなのか、フェザーなのか、あるいは裏返しか、分からなくなってしまつて困ることがあります。／…パートは、水上では、声を出さずぎてはいけないこと、静かにしておかなければならないと説きました。…

視覚障害のオアズウーマン、一人で漕ぐ

Visually Impaired Rowers Row It Alone

本項は、row2kのウェブサイトにて2004

www.row2k.com/features/features.cfm?action=read&ID=8

に掲載されたもので、視覚障害者のためのロウイング・プログラムにおける、女性2人の漕艇体験の紹介である。ガイドの助けを借りながらも、一人でシングルを漕ぐすばらしさを紹介している。(抜粋 全文訳は、ボートライフNo. 187/太田川IBC, 2004. 11に所収)

タミー・スワイアンテク, リネット・ルイス

ペンシルバニア州・ピッツバーグ2002

タミー: 私はTRRAで、BOLD(視覚障害者野外レジャー開発)のロウイング・プログラムで11年間以上、スカルを漕いできました。生まれつき目が見えなかったので、ボートを一人で漕ぐ感覚一何か安定させるか舵をとるような道具なしでのボートの上での感じを味わうことはたぶんないだろうという事実を、普通に受け入れていました。／6月16日土曜日のその朝までは！その曇り空の朝、私はオルデンのシングルにすわり、左手を棧橋にかけ、右手でオールを、まるで、それが命綱であるかのように、ぎゅっと握っていました。…ボートを押し出し、右舷のオールの下にあるものが、棧橋の木から水に代わったのを感じたとき、私の心臓の鼓動は、どんなストロークより速く高鳴りました。

しばらく、私は棧橋につながれた状態でボートに座り、バランスと、オールのコントロールを試しました。どんな生き物でも、モーターボートでも、水の上ならゆらゆらするものなのに、水に浮かんだオルデンは、バスタブに似て、ほとんどぐらついたり弾んだりできそうにありませんでした。しかし、どういうわけか、ひっくり返るかと思えながら、オールを上げそつとフォワードしながら漕いだ最初のストロークでは、ボートは、私が漕いだ最もスマートな競漕用ダブルスカルと比較しても、水面にかろうじてバランス